カッとなって子どもを叩かない法

自分の気持ち
子どもの気持ちがわかる
セルフ・カウンセリング

渡辺康麿 監修
渡辺ミサ 著

学陽書房

叩くとなんとすっきりするんだろう！

――憎しみの向かう先は本当は継父・母だったことに気づく
被虐待体験を克服して子どもに優しく接することができた

橋本　明子

私は二〇歳で結婚しました。一人っ子の私は祖母にかわいがられて育ち、小さい頃は幸せでした。しかし両親は私が五年生の時に離婚し、優しかった父は家を出ました。母はそれからまもなく再婚し、新しい父が来ました。

でも、それは私にとっては悪夢の始まりでした。仮面をはいだ継父は、ちょうど子どもから大人に変化していく年齢の私の体に露骨な興味を示したのです。それは次第にエスカレートし、胸を触ったり、キスをしたりするまでになりました。

耐え切れずに母に救いを求めましたが、母は私を見捨て、〝女〟としての道を取りました。「そんな嘘をつくなんて恐ろしい子どもだ」と継父をかばい、私に背を向けたのです。生きていくためには、私は人形になって、ただじっと耐えるしかありませんでした。

障害児を叩くなんて許されないの？

——怒っている最中に我に返れるようになった夫に手伝ってが言えるようになった

工藤 由紀子

私には男の子どもが三人います。自分がひとりっ子で、親に振り回され続けたので、自分が親になったら、子どもにはきょうだいを持たせてあげようと思っていました。三人の子どもがいたら、子どもどうしの世界もでき、親に支配されることはなくて済むだろうとも考えていたのです。

次男は三歳の時、知的障害があることがわかりました。夫も私も健常者として生きてきて、親族にも障害者がいなかったので、自分たちの子どもがまさか障害があるとはまったく考えもしなかったことでした。

次男に障害があることが、わからないで育てている時は、この子は長男よりも手がかかる子どもだなあと思っていました。次男はとにかくパニックを起こしては、どこででもひ